

日の丸

寄贈／羽世田幸子

日本赤十字社の看護婦だった渡邊君江さん(20歳)は、日赤第675救護班として召集され、被爆時は大竹海兵団に勤務していた。

被爆後君江さんは、次々に運ばれてくる負傷者を食事も忘れ、泣きながら治療にあたった。

それから12年が過ぎた頃から君江さんは体調を崩し、何度か病院を変え、手術や入退院を繰り返したが原因ははっきりせず、翌年2人の子どもを遺して亡くなった。

